

ラウンドテーブル：都市景観をグリーンインフラとして活用する

コメンテーター：

岡野 隆宏（環境省）

舟久保 敏（国土交通省）

土肥 真人（東京工業大学）

佐々木 雅幸（同志社大学）

コーディネーター：菊地 直樹（金沢大学）

（菊地） ラウンドテーブルでは、セッション1と2での議論を踏まえて、今後金沢で、いろいろなものをグリーンインフラとしてどのように活用できるか、そのためにはどのような人たちが協働した方がいいのかという話し合いができればと思います。ただ、大きなテーマなので、当然、今日で結論が出るわけではありません。皆さんと議論して、今後につながるようになればいいのではないかと思います。

昨日、一部の関係者で、金沢市の全面的な協力の下、エクスカージョンを行いました。私はまだ金沢をよく知らないの、金沢のことを知る機会になった、非常に充実したエクスカージョンでした。東京工業大学の土肥さんをはじめとする方々が、エコデモシートを使ってエクスカージョンの結果をまとめてくださいました。今朝、4時までかかってやったということです。金沢の景観はエコロジカル・デモクラシーの視点からどう見えるかという話をしていただいた上で、コメンテーターの話につなげていきたいと思っています。では土肥さん、よろしくお願いします。

（土肥） 今日はグリーンインフラの会議で、8人の話を聞いて頭がパンパンなところに、またカタカナの「エコロジカル・デモクラシー」が出てきてしまいました。

私の本職は東京工業大学で建築系にいますが、出身はランドスケープなので、今日お話しされた方とは同じ研究室出身だったり、いろいろなところで接点があります。ランドスケープの中で、エコロジカル・デモクラシーという考え方はアメリカから来ています。私が翻訳した『エコロジカル・デモクラシー：まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン』という本が2018年4月に出版しました。エコロジカル・デモクラシーには15のデザイン原則があります。エコロジーとデモクラシーを一緒に考える、自然と社会を一緒に考えることをマインドチェンジ的に、最初は強制的にでもやってみます。そうするといろいろなことが起こってくるし、実際にそのような回路が今でもたくさんあるというのが前提です。「エコデモは、ここでも、どこでも、あそこでも」と、原著者のランドルフ・ヘスターさんが日本語で最近言っているそうです。

このシンポジウムの本当に面白いところは、エクスカージョンを丸一日かけてやってから会議をすることです。今日登壇された方々は、昨日一日一緒にいて、夜も一緒に飲んだので、もう何となくお友達なのです。去年は、2日間エクスカージョンをやりました。私たちは、去年も呼んでいただきました。そのときにこのシートをやってみて、面白いということで、今年も参加させていただいています。去年イタリアのボローニャから来たバレンティナ・オリオリさんは、イタリアでもやってみよう。非常に面白かったと言っていました。うれしいことです。

エコデモは、エコロジカル・デモクラシーの略です。「自然を治せば社会は治る、社会を治せば自然は治る」という不思議な回路があるということです。それはとても大事な回路だけど、私たちにはなかなか見えにくいので、これをどのように見ればいいのかを考えてきたわけですが、とてもシンプルな、「エコデモ発見シート」というものを作ってみました。昨日、エクスカージョンの途中で1回25分ぐらい時間を取っていただいて、一緒にエクスカージョンに行った20名の方々に、昨日1日歩いたところのどこかの風景を思い浮かべ、その社会的なことについて思い浮かべたこと、生物や自然、天気や季節について思い出したことがあれば書いてもらい、それがどのように風景に表れているか、

あるいは表れていないかも書いてもらいました。

昨日は7カ所くらい歩きましたが、好きな場所を書いてくださいとお願いしたら、3カ所になりました。出てきた意見を全部書き出してみたのが、それぞれのシートになります。場所は兼六園、鞍月用水、武家屋敷の3カ所です。それぞれ7人、11人、8人に書いてもらったものをまとめたものです。

これから、エコデモ発見で、このようなものが見えたということをお話ししたいと思います。これをどのように見ているかという、こういう意見があったということと、私たちも昨日一緒に歩いているので、これを頭の中に泳がせます。例えば鞍月用水だったら、10年後、20年後、あるいは50年後にこのようになっていけばいいのにと探します。何となくこういうことかなと思ってきたときに、例えば、青いのがここに関係ある、ピンクはここにあるということをやっていきます。ですから、単なる構造分析ではなくて、未来からバックキャストしているのです。そのようなことが、このエコデモ発見の鍵です。

それでは、昨日のエクスカージョンの様子からいきましょう。全部で7カ所ありました。昨日も盛りだくさんでした。基本的に、用水を巡らせてもらって、辰巳用水、鞍月用水、大野庄用水の三つに付属している場所が選ばれています。

最初に行った鞍月用水の土地改良区で、北方理事長のお話を聞きました。すごい話が最初から聞けて、ハートをつかまれてしまいました。

兼六園の小立野口から入ったところに、大きなケヤキの木がありました。

野村邸は、小さい庭なのに、段差の池になっています。どうやっているのだろうと想像していたら、ポンプアップしていると聞きました。ここで私は抹茶を頂きました。

エクスカージョンをした後に、皆さんにお願いして、エコデモシートを書いていただきました。好きな場所を書いてもらったら、結果的に3カ所になりました。これを今からご紹介します。

兼六園は、われわれが「こうなればいいのに」と思っても手が出ないくらいに完成された美ですから、なかなか思いつきませんでした。皆さんの意見を並べて、頭の中に置いてみると、昨日は夏の蒸し暑い1日でしたが、雪が降り、桜が咲き、梅が咲き、月が出るという時間が、あそこにはいつも流れています。もちろん加賀百万石の歴史も流れていて、それを示している巨木が生えています。そのような時間のランドスケープの変化を楽しむことができます。あの庭に入ったときの涼しさや静けさなど、肌で感じる自然が、昔はきつこうだったのだろうな、このようなどころをお殿様が歩いていたのだろうなということを思い起こさせてくれるのです。一方で、それを実現している水の不思議さがあります。用水のトンネルの突堤にお城ができたのは、防衛上の理由だと思います。その防衛上の理由から、いつの間にかあの美しい庭ができました。あの高台に垂直と平面のコントラストの庭ができていて、われわれが入った小立野口から、辰巳用水が二つに分かれるそうです。地下から来たきれいな水が庭に入って行って、辰専というマンホールがあると教えていただきました。上を流れている水は、落ちていくそうです。それは恐らくお堀になり、軍事用の水になる、庭に入っていった水は平和な水になるということ、みんなで話しました。

兼六園の水の入り口は、観光客の入り口と反対側なのです。上の方から入っていきます。これがまるでタイムカプセルのように金沢の真ん中であって、それは外との水のつながりの中で生きています。地球の自転や公転によって、あの庭はずっと生き続けているということです。

一つ面白い提案は、水の流れに沿って庭を歩いてみるのを、一つのコースにしてみたらどうかということです。昨日われわれは初めて歩いてみたのですが、すごく素直でした。いつもは、反対向きに歩いてしまいます。そういうのが、時間の流れと関係あるのではないかということです。

武家屋敷もすごく面白い発見がありました。

エマニュエルさんの発表にありましたが、庭というのはやはり異様な多様性なのです。これは完

全に人為的なものであり、そこに一つの世界ができています。それはある時代の美であって、ある意味贅沢であり、個人の自由な欲望が完全に発露された、一つの世界です。私たちはそこに美を感じるけれども、それはわれわれの時代の美ではもうありません。でもそれを美しいと感じる心を、われわれは今でも持っています。大野庄用水の横の道を歩いていると、シークレットガーデンがその奥にあって、その庭はおもてなしの心でできています。そういうものを感じます。そのような物語が提案できたということです。

鞍月用水は行った瞬間に、北方理事長が、「今日は雨の中を来ていただいて、ありがとうございます。皆さんにとっては大変だけど、私たちにとっては恵みの雨なのです。ずっと雨が降っていなかったけれど、これでホッとしました」とおっしゃいました。用水にはいろいろな機能がありますし、それをずっと彼らが管理をしているわけです。今は機能別に社会ができていますから、イコール総合的な連携が必要になるわけですが、恐らくそれを超えているものが、そこにあります。北方さんは「田んぼに入ると、ぬるっとしてとても気持ち良くて、みんな好きになる。それはお母さんの胎内にいる感じがするからではないか」とおっしゃっていました。そのような感覚です。この価値は機能の足し算以上のものであって、これが物語を生むということです。これをエコロジカル・デモクラシーでは、聖なる物といいます。15原則の中でも一番重要な価値です。これが、私が最初から心をつかまれた理由です。いろいろな生き物と用水を共有し、それを知ることによって、われわれはもう一度教育されることができます。

朝4時まで一緒にやってくれた金沢大学の4人の方と、1人1用水制度で、金沢にいる人は用水を一つ持ったらいいのではないかと話しました。55本あるので、単純に割ると8343人です。「8343(優しさ)」になるのではないかと。ちょっと数字はインチキしているのですけど。

もしこれで多過ぎるなら、用水を増やしてもいいのではないかといいです。シビックプライドをつくるための新しい用水、コモンズをつくるための用水です。これは飯田さんがおっしゃっていた、新しい文化をつくるインフラです。用水をこのように考えることができるのではないかといいです。

今三つの用水で3カ所のことをお話ししましたが、ここに出てきているのはすごくスケールが小さい自然と社会の関係です。だけど、あつという間に犀川につながるし、奥の山につながるし、海につながるし、雨につながるという、大きな循環の中で全てがつながっていることが一つです。さらに言うと、環境の限界と資源の限界が明らかになっている中で、社会の方がそれにアジャストしていません。このままいくと、恐らく完全に滅びてしまいます。それに対してどんな社会があり得るかを構想しなければいけないのが、エコロジカル・デモクラシーなのです。ただし、その種が既にそこら中にあります。グラスルーツからそれを伸ばしていくと、そこが良くなるだけではなくて、世界中が良くなる、地球が良くなる回路になるということが、エコデモの考え方です。

昨日4時までまとめてくれた4人の方、ありがとうございます。金大の学生は、すごく優秀です。私は感動しました。それから昨日一緒にエクスカージョンをやってくれた方、どうもありがとうございます。これを私のエコデモ的発見の報告にします。ありがとうございます。

(菊地) 土肥さん、ありがとうございます。こんなにまとまるのかと、素直に感動しています。1人1用水は、すてきな考えだと思いました。実現するかどうかはともかく、こういう大胆な提案をするのも重要なことですね。

土肥さんの報告も含めて議論したいと思いますが、せっかくコメントーターを呼んでいますので、今日の議論を聞いてコメントしていただきたいと思います。まず環境省の岡野さんからお願いします。

(岡野) 皆さん、こんにちは。環境省の岡野と申します。何で今日ここに来ているのかですが、Facebook で菊地さんがグリーンインフラのことをしているのを見て、「僕を呼んで」と言いました(笑)。金沢に来てみたかったというのが一つです。

実は、先ほど西田さんと上野さんの発表でもご紹介いただいた、「自然と人がよりそって災害に対応するという考え方」を作ったときに、担当していました。これまでも Eco-DRR (生態系を活かした防災・減災) やグリーンインフラなどを考えてきたこともあって、今回参加させていただいています。

これを作ったきっかけは東日本大震災です。自然の猛威で、大きな被害が出ました。その後の対応の仕方をどう考えていくのかということがあります。あれは、私たちの社会の考え方を変えていかなければいけない出来事だったのではないかと思います。

その後、防潮堤がどんどんできていき、これでいいのかという中で、自然ともう一回向き合うことを見つめ直そうと、人は自然とどう向き合っていくのかを考えたいということで、生態系をうまく見ながら。「生態系を活用した」という言い方をすると、木で災害を抑える感じになりますが、英語では「ecosystem based」なので、自然の地形を見ながら、人がどう暮らしていくのか、どういうところに住んでいくかを考えようというのがこの考え方です。

そういった考え方をまとめていったのですが、なかなか広がっていかないという中で、自然からの災いをどう避けるかだけではなく、自然の恵みをもっと生かして地域づくりにつなげるという、トータルでやっていく考え方をもっと広げるべきではないかと考えました。それで「つなげよう、支えよう森里川海」というプロジェクトができました。森里川海という自然の恵みを生かしながら、地域が元気になって、社会・経済も向上させていくということです。先ほどのエコデモと同じ考えだと思います。

自然環境は、これまで社会・経済のいろいろな物事の中で押さえ付けられてきたというか、改変され続けてきました。これから人口減少、あるいは社会が縮小していく中で、元々地域にあるものをどう活かしていくのか、それで経済・社会をつくっていくことを考え直そうということで、「つなげよう、支えよう森里川海」というプロジェクトをつくりました。地域には自然という資源があるのだという考え方で、地域の社会をつくっていき、それを補う形で都市と農村が交流していくような社会づくりをしていこうということで、そのようなプロジェクトを行ってきました。今年4月に環境基本計画という国全体の計画を作りましたが、その中にも盛り込まれました。少し難しいのですが、そのような考え方を「地域循環共生圏」という言葉で入れています。

今後の重点戦略の一つとして、国土の価値の向上、ストックとしての価値の向上を図っていくという項目を入れました。そこにグリーンインフラと Eco-DRR を活用していこうという形でまとめています。環境省としても、こういった施策を進めていきたいと思っているところです。

今日のお話を聞いてのコメントです。まず、昨日エクスカッションに参加しなかったのが残念でならないという一言に尽きます。やはり、ちゃんと現場を見るべきでした。私はベースが造園なので、やはり見ていないと語れません。それが一番の反省です。

今日お話を聞いて、地域に資源がある、環境があるという視点に立って、それが全て人の暮らしや文化、経済を支えるインフラであるというように見直すと、いろいろな見方が変わってくると感じています。グリーンインフラとグレーインフラを対立軸に捉えるのは良くないという話があります。言葉の印象として、グレーインフラだと行政がつくって行政が管理するものというイメージです。グリーンインフラとなると、地域の全てがインフラならば、それは誰が管理して、誰が使っていくのかという議論になります。それが今日の議論のベースになってくると思います。

金沢には魅力的な種がたくさんあるのだなど、今日お話を聞いて思っています。それをどう生かしていくのか、先ほどもコモンズという言葉がありましたが、協働的にどう守っていくのかという

ことで、地域の魅力として考えていくことがすごく重要だと思いました。地形から見て、金沢は水が湧いてきてという考え方をすると、集水域としての圏域の中で金沢がどういう役割を果たしていくのかも非常に重要だと思います。先ほどの発表で雪吊りの竹が山口、長崎、縄が東北という話があって、「おお」と思いましたが、元々地域にそのようなものがないのかなと思ってしまいました。もしこの周辺で竹が増えて困っているのなら、それを使ったらいいと思います。縄も地域のものを使えば、金沢の経済として回っていきます。それが自立・分散型地域循環共生圏だと思います。そのような視点で、金沢が集水域や圏域を含めたグリーンインフラとしてどういう役割を果たすのかを考えていくと、もっといろいろ楽しいことが考えられるのではないかと思います。

(菊地) 岡野さん、ありがとうございます。次はゆっくりと金沢のまちを歩いていただければと思います。

では、昨日の夜のエクスカッションから参加された(笑)、舟久保さん。

(舟久保) そんな紹介のされ方(笑)。国土交通省の国土技術政策総合研究所から参りました舟久保と申します。今日参加したのは、上野さんが前職で同じ研究室にいらっしゃったことがあったので、お声掛けを頂いたということです。上野さんとは、すれ違いになってしまったのですが、自分の勉強のためということもあって参加させていただきました。

私はコメンテーターという立場でお話をするというよりも、感想を述べさせていただきます。実はグリーンインフラという言葉を知ったのは、恥ずかしながら2年前です。私がこのポストに来て2年経つのですが、2年前に初めて聞いたのです。私は岡野さんと同じく造園職で国土交通省に入り、公園緑地の整備保全を主に担当していました。その言葉を聞いたときに、正直これまでの公園緑地の整備保全と何が違うのかと思いました。なぜこんな言葉が生まれたのかと思いました。

その後、それに関する本を読みました。といっても、ほとんど『決定版! グリーンインフラ』以外はちゃんと見ていません(笑)。あるいは関係の講演会に聴講者として出席し、グリーンインフラが分かったような、今でもよく分からない面もあります。

私から見て、グリーンインフラの取り組みは、これまでの取り組みを連綿として続けていくという内容もあると思いますし、そうではない取り組みを行うという、両面性を持っていると思います。その両面性で私が一番思う大きな話は、やはりグリーンインフラという言葉にあります。インフラという言葉、自然保全あるいは公園緑地の整備保全の世界に使っているのが、ある意味一番大きな話だと思います。

グリーンインフラという言葉自体は、私が思うにはすごく良い面と、悪い面と言っていいのか分かりませんが、曖昧さが許されなくなった面という、二つの側面があると思います。

まず、良い面です。自然保全なり公園緑地の整備と言ったときは、総論としては、それに悪口を言う人は多分誰もいないと思います。ただ、あまり身近なものとして考えられません。人ごと感があります。それがそもそもいけないのだらうと思いつつも、やはりそのようなことがあったのではないかと思います。自然が豊かな地域において、動植物にとって重要な自然を保全する行為なのだろうという意識が少しあったのではないかと思います。それにインフラという言葉を使うことによって、もっと身近な、自分たちの生活の問題の解決につながる取り組みということで、もっと多くの人に関心を持てる言葉になったのではないのでしょうか。

もう一つ、自然は侵すべきではない存在で、それに配慮するという話があった中で、グリーンインフラが大きく違うのは、西田さんからのお話があったように、自然の機能を生かす、活用するという視点です。身近な社会問題を解決するものにグリーンインフラと呼ばれるものを使うことで、多くの人に関われるし、さらにより積極的に自らの問題として関わるといところが変わったの

ではないでしょうか。それが良い面だと思います。

ここには私しか国土交通省がないので、国土交通省の見解を述べているように聞こえてしまうかもしれませんが、決してそんなことはありません。私は国土交通省を背負ってお話できません。ちなみに国土交通省が考えるグリーンインフラについては、「国土交通省 グリーンインフラ」とヤフー検索をしていただくと、環境政策課が作った一つのPDFがヒットします。環境政策課が各局とも話をして、今の国土交通省が考えるグリーンインフラに対する姿勢を書いているものです。私は作ったときに全く関与していないので、一つの考え方として納得する面もあるし、「うーん」と思う面も正直あります。一応、参考までにお知らせしますので、興味のある方は見てください。

話を戻します。インフラという言葉を使うと、これまでであったインフラと並び立つというか、その土俵に乗る形になります。グリーンインフラは多機能性があるといわれますが、それはどれくらいの量を作るとどのくらいの効果があるのかという、定量的な効果評価をしなければいけないのではないのか、そうでないとそもそも物がつくれないのではないのかということになります。その話が、まず一つとても大きいと思っています。

そのことを解決するのは、やはり研究者の取り組みだと思います。私も研究所にいる以上、そのようなことを考えなければいけないと思っています。そもそも多機能というのは、どれくらい調べればいいのかということがあります。目に見えないというか、実感としてはあるけれども、どうやって測定するのか。効果を拾い上げないと、本当の意味の価値評価にならないのではないのでしょうか。

そのようなことを考えると、なかなか難しいというか、そこがインフラという言葉を使ったことの良い面に対する、もっとストイックに考えなければいけない点ではないかと思います。

ただ、その点については、今日最後に菊地先生が順応的ガバナンスの話をして、今し方、エコデモの話で実感として持てるような価値、金銭価値にできないような評価を重要視する動きが出てきているという話を聞きました。学問的にはすごく新しい体系なので、それをどうやって織り込んで、併せて推進していくかは難しい課題だと思いつつも、そのようなことに取り組みなくてはいけないというところではあります。

もう一つだけ話します。先ほどの岡野さんの話にもありましたが、インフラというと専門家がづくって管理する感じがあります。グリーンインフラについても、一部整備については大規模な物づくりをしたり、なかなか植物を植えられないところに植えたり、土壌の改善が必要になったり、専門家領域が絶対あるので、専門家も外せないと思います。一方、維持管理を考えると、そもそもグリーンインフラの場合は公共空間だけではなく、民有地の空間がすごく大きな役割を果たすことがあると思います。雨水貯留の浸透などを考えるとなおさらです。景観もそうだと思います。公共空間とは限りません。そのときに、もっと多くの人々が携わる、一般の人々が携わることがすごく重要だと思います。

グリーンインフラが解決できるまちづくりの問題は大きいと思いますが、グリーンインフラだけでは解決できない話がとてもたくさんあると思います。今後のまちづくりを、特に少子高齢化・人口減少というこれまでと違った背景を持つ中で進めていく中で、グリーンインフラに取り組むこと自体はなかなか難しいかもしれませんが、さらに多くの方にまちづくりに関与いただくのに、グリーンインフラは一つのいいきっかけになります。事実、それがまちづくりにも貢献する内容になるのではないかと思います。それがもう一つ言いたかった点です。

最後に、国土交通省的発言を1つだけ。昔から、グレーインフラ VS グリーンインフラという言葉がよく使われます。グレーに取って代わるものがグリーンインフラというイメージがありました。それに対してかなり警戒感を抱く方がいると正直思っていますが、やはり両方に良い面があると思います。災害の話は特にそうだと思います。全てをグレーでやりきるのかという、整備も維持管

理もそんな余裕があるのかということです。その中で、多少は不明確かもしれないけれど、しかも平常時には多くの機能を持つものでそれを代替するという考え方があります。やはりハイブリッドで物事を考えることを、もっと前向きに考えていく必要があるのではないかと思います。

(菊地) 舟久保さん、どうもありがとうございます。いろいろな人が関われるのがグリーンインフラの非常にいい点だという話がありました。この場合は、まさにそのような場だと考えたいと思います。これからはフリーで、皆さんと話し合いをしたいと思います。

今日初めてこういう議論を聞いた人も多くいると思いますし、分からない話もたくさんあったかもしれません。率直に、いろいろな話をしていきたいと思います。どなたからでも結構です。一番後ろの方。お名前を言っていただけますか。

(松永) 松永日出男と申します。日出男は、日の出湯というお風呂屋さんの子どもだからです。私が生まれたところは宗叔町で、今で言う専売公社で、宗叔という加賀藩のお医者さんがいたところ。そこに日の出湯というお風呂屋さんがあり、その横に鞍月用水が流れていました。

私は石川県では、多分一番古いお風呂屋さんです。おじいさんから、ずっと鞍月用水の話聞いていました。自分の家の用水のように使って、アヒルを飼ったり、いろいろなもの飼って、せき止めていたそうです。

私がでた幼稚園は聖霊病院で、すぐ横に長町があります。本当にわがものように、あの辺を遊んで歩きました。私は石川県公衆浴場業生活衛生同業組合の理事長をしています。お風呂屋さんなのですが、実は環境の ISO を 10 年前から取っています。CO₂ も、当然削減しています。国際クレジットを取って、多分日本の中小企業ではナンバー1 です。年間 450 トンの CO₂ を削減しています。石川県のいしかわ環境フェアにも関わっています。

(菊地) ありがとうございます。他の方、どなたか。では、日本野鳥の会の白川さん。グリーンインフラの中に、もっと積極的に生物との共生を組み込む必要はないのか。今日の議論の中で、生き物と環境を前面に出さないところがグリーンインフラの新しさではないかという話が割とあったのですが、それに対してご意見を言っていいただければと思います。

(白川) 例えば今日のお話の中で、鳥の声を聞いたら子どもたちの授業への集中力が増したというのは、自然の生態系サービスを活かしているという発想だと思います。生き物や環境の豊かさがサービスを支えるのであれば、今のものを利用するというよりも、そこをもう少し豊かにするような発想というか。例えばコウノトリなど 1 回絶滅してしまったものに対して、新たな保護をしようという話がありましたが、今の状態でも絶滅しようとしている生き物がたくさん身の回りにいます。

私は小さいころから金沢市で育って、身近に生き物たちがたくさんいた思い出があります。例えば庭の石をめくれば、オケラがいました。昨日皆さんが回った浅野川や卯辰山のそばを、今もフィールドにして回っています。昔に比べて、随分生き物が減ってしまいました。あるものが、いなくなりました。それをどうにかできないのでしょうか。

今あるものを利用するのは分かりますが、昔に戻すというのはおかしいかもしれませんが、今の自然環境をもっと活かして、生き物を増やして、それにグリーンインフラを組み込んで供給できないかと思ったのです。それが後ろに行き過ぎていて、見えないところが、私は引っ掛かったのです。そこら辺に対して、皆さんどうお考えなのかを知りたいと思いました。

(菊地) 西田さんでしょうか。いいですか、西田さん。

(西田) 私も、生き物が大好きで、生態学をやっています。

(白川) 西田さんにも、お聞きしたいと思っていたのです。そのような視点で一つの経験としてこういうところに入って、その研究をするのは面白いのかなと思って、今されているということで。

(西田) 面白いです。

(白川) 環境の方から入られたのですが、今はそれに対してどう思っているのかをお聞きしたいと思います。

(西田) その心は忘れていないと思っています。生き物も個人的にはすごく大事にしたいと思っています。生物多様性の危機の問題でいくと、第1の危機は開発でいなくなってしまうことです。第2の危機は人間活動の縮小による危機、第3の危機は人間により持ち込まれたものによる危機ですが、まず第2の危機の影響が今後すごく大きくなるのではないのでしょうか。つまり、使われなくなることによる生物多様性の劣化が、全体で見るとかなり大きくなっていくということが背景としてあります。そうすると、自然をうまく活用していくことが、第2の危機の解決策の一つだと思います。そこの部分を強調するような話で、生物多様性をこれまでかなりやってきましたし、やり足りなかった部分をもう少し補強したいということで、こういう考え方もあっていいのではないかなというのを提案しました。

もう一つは、結果的にグリーンインフラは自然の機能を強化することで、生態系サービスが高くなることです。その状態で、恐らく生物多様性は豊かになるのではないかと思います。生態系サービスのトレードオフとか、どこかを高め過ぎるとマイナスになるということも、あるとは思いますが、それはもちろん配慮しながら、全体としては力をうまく引き出した自然の状態が、本来持っている豊かな生物多様性に戻っていくことになるのではないかと考えています。

(白川) そうなるとうれしいと思うのですが、グリーンインフラ全体が、何となく人の手をかけてしまう、人工的なイメージがどうしてもぬぐえない感じがします。

(岡野) イメージとしては、おっしゃるとおりだと思います。われわれも、生態系を活用して防災・減災を考えるときに、四つあるだろうと言っています。一つ目は、今ある自然を保全して維持すること。二つ目は、損なわれた自然を再生すること。それは、先ほどの失われてしまったものです。三つ目は、例えば防風林のような形で、自然の機能を生かしてつくっていくことです。四つ目は、人工物と自然物の組み合わせです。この四つだと思うのです。だから今あるもの、それから再生していくことも含めて、グリーンインフラとしてもう少し広く捉えようということを広げようとしています。

(上野) 最初に、西田さんとグリーンインフラという言葉をもとにどのように展開していくかと考えたときに、私も生き物は好きですが、生物多様性に対して理解がある人は実際は2割や1割と少ないのです。そうでない人たちに、今までずっと自然保護の中で生き物の価値を説いてきて、失敗してきた歴史があります。そうすると、これまでの攻め手では駄目だということに思い至ってしまったのです。自然を活用したらこのようなメリットがありますよと結果的に自然が守られればいいのか、

従来型のように自然保護を目的としてしまうのか。だから、アプローチを変えたのです。あくまで社会を豊かにするために、自然を守る・使っていきたいと思いますというロジックに転換したのです。それがグリーンインフラの見方です。

ただ最近では、グリーンインフラがこれだけいわれてきたので、例えば防災の面は特にそうですが、より効果の高いグリーンインフラを整備しようとしています。例えば粘り強い木を植える、浸透性の高い土壌基盤を開発するなどです。そうすると、グリーンインフラと言いつつ、ある特定の機能や植物だけが植わる、生物多様性上良くない環境ができます。ですので、最近私は多機能性をずっと言っています。多機能であるためには、いろいろな植物や動物がいるとか、いろいろな使われ方が可能な環境がそこないと駄目なのです。そうすると、結果的に生物多様性が守られるのではないかと、ぼんやり思っているところです。

(菊地) 今の話は、自然が大事と言っても広がっていかない現状があるので、窓口を広げて、いろいろな人が普通に関わることが結果的に生物多様性や環境を良くする仕組みとして、グリーンインフラを考えようという話だったと思います。

次は他の方で、日本海コンサルタントの馬場さん。無関心な住民に対して、自分が住む地域の特性、恵みや災害リスクを知ってもらうにはどのような方法があるのでしょうか。自然災害も、起こらないとなかなか実感できないけれど、リスクは確実にあります。それをどのように皆さんで共有し、実感できるかが重要だと思います。そのような観点でお話ししていただけますか。

(馬場) 日本海コンサルタントの馬場と申します。よろしくお願ひします。あくまで個人的な意見というか、疑問です。グリーンインフラやインフラを取り入れるに当たって、石川県・金沢市・自分の家がどんな特性を持っているのかを理解するのはすごく大事で、全く関心のない人たちにどう理解してもらうのが課題です。いろいろなアプローチがあると思います。教育現場に取り入れるとか、私は白山市出身なので、ジオパークを通じて教育活動をしたり、会社で一步踏み込んだ形で避難訓練を実施したりということがあると思います。全く関心のない人に関心を持ってもらうには、他にどのようなやり方があるのかなと思いました。

(菊地) 今の馬場さんの関心、あるいは悩みかもしれませんが、それに対して、登壇者以外でもいいので、私はこんなことがあるという人はいませんか。どうぞ。

(吉田) 私は白山市地域づくり塾という研究グループに入っている吉田洋と申します。私は最近、ジオパーク・エコパークの勉強会に参加しています。美川の、フグの粕漬けのお店屋さんに行くと、いつもこんこんと地下水が湧き出ています。それをペットボトルに10Lぐらいくみまします。ペットボトルも無駄にならないし、水もコンビニで売っているものよりもおいしいです。こういったことを普段からやって皆さんに伝えると、地元の資源の発見になるかなと思います。

(菊地) ありがとうございます。一つの実践例でした。他に、こんなことをやっているという人がいらっしやれば。どうでしょうか。

(宋) 先ほど韓国の事例を紹介した、宋泳根です。今の話とつなげて、ご意見を申し上げたいと思います。昨日、すごく素晴らしいところを巡ってきました。そういうところの文化的・歴史的な景観を守りましようということには異論がないと思います。発表にあった、借景のために高さ制限があるということも世界から注目されています。それは重要なところなので、みんなそうだろうと

思っています。

一番重要なのは、先ほど spot to region と言ったのですが、それを曖昧な地域にどう広められるかです。こちらに来られた方は、基本的にグリーンインフラや緑、生き物に愛着がある方だと思います。しかし、一步踏み出すと地域住民までいきません。デベロッパーや都市計画をしている方と同じテーブルの中で、自分がどれだけ緑のことを主張できるかという、現実問題がすごくあると思うのです。

理想的なグリーンインフラというのはあると思いますが、これぐらいだったら認めてくれるというようなところから勝負していかないと、spot to region もなかなか難しいと思います。地域住民が身近に自然を感じられる空間まで行こうとしたら、普通の開発などの論理と戦っていかなくてはいけなくなると思っていました。

今日話を聞いて、いろいろな問題点があると思いますが、まずデータの問題があります。エビデンスや定量的な説得力のある論理を整備することと、いろいろな機能をどんどん見つけ出して、説得力のあるものとして評価していくことです。また、復元やつくり上げる技術です。デザインでもプランニングでもあります。それぞれの方々が一緒に入って、曖昧な領域を開拓していきましょうというのが私の意見です。

(菊地) ありがとうございます。非常に厳しい現実もあるというご指摘ですね。

(土肥) 身近なことに言っていると、水と食だと思います。これは完全にそうです。今日も水の話がすごく多かったです。胎児は95%ぐらいが水なのです。生まれたときが70%ぐらいで、だんだん枯れてくるそうです。私は多分54%ぐらいになっているのではないかと思います。

毎日2Lの水を飲んで、代謝水やご飯で2.5Lぐらいの水が回っています。水道水をひねると出てくる水と全然違う水が、雨になって降ってきます。都市は、今そこから完全に切り離されています。本当は生まれる前から水の循環に私たち自身が参加しているのに、それを知らない都市生活になってしまっているのです。これを戻すのは、すごく楽しいことなのですよ。その楽しさが、物事を進めていくということではないのでしょうか。先ほどのお風呂の方やペットボトルの水の方のように、水がいかに身近にあってわれわれを支えているかを知ることは、すごく楽しいと思うのです。

これは先ほどの鳥の話とも関係があります。人間はなぜかスチュワードするのです。家の前の道路に浸透枡をつくります。機能としては、水をすぐに排出しない、地下水を涵養するというものですが、そこに植物が生えてくると、面倒を見たくなくなります。木が生えて鳥が来ると、それを毎日見て楽しくなります。そんな動物は、他にいないと思います。そのような人間の中にあるエコロジーが、水の循環と食の循環の中で戻ってくるのです。これがきっかけだと思います。

だから、どこからと言われたら、水と食だということはもうほとんど分かっていると思います。いかに都市がそこから完全に切り離されているのか。特に東京はそうです。金沢に来ると、食べ物がうまくていいと思うのですが、悲しいかな東京から離れられなくて、今でもいますが、本当にそう思います。この二つだと思います。

(上野) 今話を聞いて思ったのですが、大きく分けると、見たこともない・感じたことのないものの大事さを頭で考えて行動できる人と、実際に体感しないと行動できない人がいると思うのです。先ほどコウノトリの話がありました。私はトキの野生復帰に関わる仕事をしていたときに、佐渡ではそれまで、トキは稲を踏み荒らす害鳥だから、増やさなくてくれ、放さないでくれという意見が多かったのですが、実際は自分の田んぼにトキが飛んでくると、そんなことを言う人はいませ

んでした。あんなきれいな鳥が来たら孫に見せたいと、採算度外視で有機農法に転換します。見た瞬間に、意識が変わるのです。

今年の冬に金沢で大雪が降ったときに、用水があることで排雪が可能になりました。そのような地域の人たちは、用水のありがたみをひしひしと感じたと思います。それまでは水が流れているだけで、子どもが落ちたら危ないと言っていた人たちの意識が、そこで転換したのです。

ですから、大事さを伝えることも大事ですが、いくら言葉で言っても伝わらない場合が多いと思います。重要なことは、管理者など意思決定者の意識をまず変える・形にして見せることです。その次に、多くの人がある便益を感じたときに、初めて全体の動きとして変化してくるような気がしました。

(菊地) 頭だけではなくて、体で感じる場面もたくさんつくらなければいけないというお話だったと思います。例えば、鳥の声を聞いて、見て、幸せだと思えるのは、人間にしかない力なのかもしれません。人間らしいところを大事にしていくことがものすごく重要な視点だと思いますし、そのようなものを活かすのがグリーンインフラだと思います。

かなり議論が拡散してきたので、私の方で若干の整理をした上で、残り30分ぐらい話し合いをしたいと思います。今回グリーンインフラをテーマにして、長丁場のシンポジウムをしています。これによって金沢のいろいろなものがどのように見えたのかを、地元の方にお聞きしたいと思います。これではよく分からなかったかもしれないし、何か気付きみたいなものがある人もいたかもしれません。せっかくこういうテーマで、皆さん来ていただきましたので、学んだこと、欲求不満なことを率直にお話ししてくれる人がいればいいと思うのですが、どうですか。

(松永) 私は諸江で、道路景観の委員もしています。道路の両脇に、グリーンが少ないのです。街路樹があるところはいいのですが、細い道が非常に多いです。国土交通省も、それを削って緑をつくることできないということで、私有地の両脇に木を植えたらどうだろうという提案をしました。採択されて、諸江のマンボウの前から平和堂の前まで、街路樹を私道の両脇につくってもらいました。賛同してくれる人、くれない人もいるのですが、緑が生えて、とてもいい道路になりました。こんな考え方もあります。

それから、家庭の中に緑が少ないのです。空いた地面をみんなコンクリートで埋めています。あれを何とかできないのかと思います。他県で取り組んで、緑を増やしているところもあると思います。その辺の考え方はどうなのでしょう。

(菊地) 今の話だと、今日は庭園の話がありましたが、プライベートな場所ですよ。でも、用水という公的に管理しているものによって、庭園が維持されています。それはあくまでも私有地です。でもそれがグリーンインフラとして、いろいろな機能を果たしていますし、フアンさんの話は、空き地や空き家などの私有地に新しい価値をつくらうというお話だったと思います。福岡さん、今の話はどうでしょうか。

(福岡) 私は今、東京農業大学の造園学科で教えています。学生は、緑が大好きで入ってきます。でも、山に行って手入れをすると、下草刈りなどがつらいではないですか。そのようなことも含めて、緑はすごく難しいと思います。学生はいいイメージを持って入ってきますが、実際緑と付き合っ、育てるのは大変だと思います。

都会の中だと、木を植えてしまとなかなか後戻りできない場合があるので、最近は空き地や私有地を1年間だけとか夏の間だけなど期間を決めて、その間だけ芝を張っています。芝が枯れてし

まったり、いろいろなことが起きますが、そのような場所があるだけで、緑はあまり興味がないけれど、そこでコーヒーを飲んだり、犬を連れてきたりという人が出てきます。

先ほどの白山の日本海コンサルタントの馬場さんへの答えにもなるかもしれませんが、場所に少し手を入れて変えることが大事ではないかと思います。木1本でも、芝でも、何でもいいと思います。何が興味のない人を引き付けるかは分からないのです。都市に住んでいると、どうやったら人が出てくるのかという、ある意味実験みたいなところがあります。そこから分かることも結構あるし、それがだんだん盛り上がってくると、活動が村化したりします。人間も、生き物だと思わず。そこでどのようにしてその場所の自然をつくっていくかはすごく難しいし、答えはないですけど、私は、みんながいいと思えるような場所をつくることに参加したり、そこで楽しいことをやったりというのが、最初の一步としてはいいのではないかと思います。

そのようなことが何となく伝わって行って、それが結果的に家庭の中に緑が増えることにつながるかは分かりませんが、よく行政がやっている、苗を配ったり、緑の教室をやったりすることだけではとても追い付かないので、そうではないやり方で興味を引くこともあるのかなと思います。背景にはあるけれど、緑を植えることが目的ではないという手法を、私は最近やっています。

(ファン) 先ほど馬場さんからあった、関心がない人をどうするかということについて、私は庭園の清掃活動をしていて、参加者の70%は元々そのことを知らなかった人たちですが、自分の研究を紹介すると、興味を持ってくれて、参加者が増えました。関心を持っている人は多いと思いますが、知らないのだと思います。自分の研究をたくさん紹介すると、みんなの関心が上がると思います。

それから、家庭の中に緑が少ないということについては、日本の文化は素晴らしいと思いますが、明治時代から、洋風の文化が入りました。日本人の哲学は奥が深いと思いますが、なぜ今、日本のまちの中に面白くない緑が増えているのか理解できません。問題は、日本人が自分の文化を忘れたことです。今、日本庭園の価値がないように見られているのがおかしいと思います。今日、日本庭園の話をしたのは外国人ばかりです。もちろん私は、ここに住んでいるので、日本造園学会石川連絡会でいろいろ学んでいます。もう一回日本の文化を学んでいただければいいと思います。

(菊地) エマニュエルさんも別の視点から。

(エマニュエル) そうですね、少し違う観点で。確かに明治以降の近代化は、日本では非常に著しいですが、かといって日本人が全てを忘れたかということ、そこには疑問があります。近代以降は全て西洋の影響だから、西洋が悪いと簡単に片付けるところもあります。

庭園の文化は、はっきり言うと結局お金持ちの文化で、一般的には恐らくそんなに普及していなかったと考えることもできます。今私たちが見ている庭園は、お金持ちがつくって、お金持ちが使うものです。もちろん一般の人がつくったのですが、お金持ちの遊び場としてつくられただけです。今は公共施設になって、一般の人が入って、そこでいろいろと考えるようになったので、そこから新たに昔の人の知恵を学ぶことができるというのがあります。

先ほど非常に面白いと思ったのは、狭い道に街路樹が植えられないので、私有地に植えるという話です。日本で歩道を歩いていると、全く庭がない個人宅で、歩道に、完全に自分の私有地と同じような形で鉢植えを置いています。そしてそれが、景色になっているのです。完全に一つの景観としてあります。公有地と私有地との境がほとんどない状態だけれど、それも一つの緑です。グリーンインフラとして考えられるかどうかは私もよく分からないのですが、あのような緑との接し方は非常に面白いです。

(菊地) 確かにそうですね。法的には駄目なのでしょうけれどね(笑)。どうぞ。

(北川) 北川文男といいます。居住空間が専門ですが、文化創出家として40年来ています。これで職種をつくろうと思うのですが、誰も賛同者がいないので1人です。

私は金沢生まれではなく能登生まれです。先ほど、金沢の三つの用水の話がありましたが、金沢の文化の中に宗教心があるという、一番大事なことが抜けています。これに基づいて、全てが形づくられ、交流・絆ができています。草むしりが面倒だからといって、金沢の宅地はみんな舗装したので、水が溢れるのです。そうすると、道路が川になります。用水になるのです。何も物が分かっていないのです。聞こうとしないのです。部局がないのです。話をする場所がないのです。私はこれを、40年間言ってきました。実は石川県の森林環境税というのは、私が考えたのです。それから能登のある大学が使っているキャンパスは、JICAの日本校として、荒れた限界集落・農林漁業がみんな関わったワークショップの場として考えたのです。能登の地震うんぬんのときも一緒です。物事が起きてからでは遅いのです。歴史を学ぶことが、事前に防ぐことにも、植えることにも全部関わってくるのです。だから、こうして会って話をする、経験することも大事です。北陸は特に宗教心でつながっているのです。加賀藩は、特にそうなのです。

私はその論文を、30何年前から書いています。発表するきっかけがありません。だけど今度9月18日の県民大学で、私は1時間半当たりました。しゃべるために、6年間かかりました。こういう格好では、駄目です。今日みたいなことが繰り返されれば、もう少しいろいろな話ができます。宗教心とは、日本だけではないのです。基本も何も分からないのだから、皆さんできるわけがないのです。私は手取のダムの開発のときに、アメリカのモートン・ヒューバーという、エコロジーの大先生に教わったのです。生活するための糧(自然)を壊してはいけないのです。生活の源流が下がってもいいのかと言って、私は探っていきました。そして、ノーモアリターンというレポートで、アメリカの単位をもらったのです。本当は、居住空間が専門なのです。人が気付かないことに気付くことが、日本の文化にあったのです。これが宗教心だと思います。いろいろな出会いなのです。絆があるのです。

(菊地) 宗教と環境は、実は密接に関係している話なのですが、グリーンインフラの議論には正直乗り切らないところがあります。土肥さん、何かありますか。

(土肥) エコロジカル・デモクラシーで一番重要な原則には sacredness と書いてあるのです。これを私は聖性と訳しましたが、宗教心と言ってもいいと思います。神さまというよりは、日々何かをすごく大事にし、自分の体の一部のように感じる、家族のように感じることなのです。『エコロジカル・デモクラシー：まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン』を書いたのは、私のアメリカの先生です。日本人は宗教を持っていないからとみんな言いますが、京都に1年住んでみると、日本人ほど礼儀正しく、お社があれば手を合わせる人はいない。これほど環境を大事にして、いろいろなところで神さまを見ている人はいないのに、なぜ自分たちは宗教心を持っていないと思うのだろうと言っていました。

私は、宗教心とは訳せませんでした。聖なる物として訳しました。グリーンインフラでは、あえてそれを言わないのだと理解しています。先ほどからの話で言うと、結果的に鳥が好きになる人が増えることはそういうことなのだとしたことだけれど、私の意見としては、早めに言った方がいいのではないかと思います。バックキャストで未来がこうなればいいなというところから今を見ることです。そうしないと、先ほど舟久保さんがおっしゃった評価ができないのです。何ができたか、

できないかを機能の評価の足し算でやると、やはり単機能に戻ってしまうのです。そうではなくて、一体どこを目指しているのか、みんながいたわり合って、生物も環境も人間同士も、そのような社会をもう一回つくる。しかもそれは地域課題だけではなくて、地球的な課題であることを一人一人が分かれば、自分の家を舗装するのがどういうことなのかが分かります。

そのような価値が達成できたかということが評価軸になれば、起こったことを評価できるのです。それがグリーンインフラで、今おっしゃった宗教心との関係だと思えます。根本的な価値を、グリーンインフラが変えようとしているのだと思えます。戦略的にそのようなことは言わないのだと思いますが、それが戦略的に正しいかというのはこれから大きな議論になるのではないかと思います。順応型のところはそうですね。

(菊地) 飯田さん。

(飯田) 今のお話にもありましたが、多機能性をどう評価するかという舟久保さんのご指摘がありました。私もずっと考えていたのですが、結局一か二つ以上かだと思うのです。多機能は2から無限大で、それを最初から設計できるのかというところを疑問に思っています。大事なのは、「多」の振れ幅をどうコントロールするかというか、2を3にする、4にするという増やし方をきっちり考えることが重要だと思います。

先ほどの街路樹を植える新たな取り組みをしているのは、まさしくそのような事例であって、市民がやろうとしていることをどうサポートするのかとか、むしろこれはやめてよということもあります。そのあたりの価値基準を、行政も含めて話し合っておくのが一つかと思えます。

もう1点追加すると、私はホテルの発表をしました。あれは30年以上続いています。最初は、私がインタビューもしました。金沢市職員だった新村さんは、化学の職種で、ずっと水質の分野でやっていました。そして、用水の水質が悪くなってきたので、ホテルを指標にして環境改善を図ろうという取り組みを始めて、自分で市民団体を立ち上げました。行政にしながら、外ともつながることをしました。ある意味、単機能を多機能化したような役割があります。

行政の中にも、そのようなモチベーションを持った方が必ずいると思います。そうした人たちと市民が一緒になって、多機能化を計画するのではなく、つくり出していくことを考えていく必要があると思います。

(菊地) まとめのような話でした。本当にそうだと思います。今回はあまりそこが議論できていません。ここには行政の方、研究者、一般市民、自然が大好きな人、農家の人など、いろいろな人がいます。いがみ合ってもしょうがないですし、考え方や、やろうとしていることが微妙に違って当たり前だと思います。同じはずはないのです。そこを乗り越えて、お互いの強みを生かしながら、いかに金沢のまちを多機能にしていき、持続可能な社会をつくっていくかということが続けたいと思います。私は来たばかりで、偉そうなことを言っているような感じですが、そのようなことに少しでも力になればと思っています。

そのために、行政はどういうことができるのか。研究者でもいろいろな評価ができる人がいます。現状の情報を整理して把握するのは研究者の得意分野です。市民は日々の中で感じるいろいろな思いなど、研究者には見えない、違うものが見える力を持っていると思うのです。そういった違いをいかに融合させながら、必ずしも一致しなくてもいいので、一緒に前を向いていくきっかけに今回のシンポジウムがなればいいなと考えています。

本当は、議論したいことがたくさんあります。グリーンインフラという視点を皆さんに紹介して、どんな感じに見えたのかをもう少し議論したいという気持ちもあります。それから、金沢らしいグ

リーニンフラをどのように考えようかということです。

昨日は、よそ者が中心で金沢を見て回りました。われわれは観光客的な目線もあって、面白い、面白いと言っていますが、地元の人にはそうではない、全然違う視点が当然あると思います。そのような視点を交ぜながら、金沢らしいグリーンインフラは何かという議論をしていきたいと思いません。

(島) 金沢 21 世紀美術館館長の島と申します。今日は非常に充実したお話で、私も知らない話題がたくさんあったので、非常に刺激的でした。せっかくこれだけ充実した話が展開されているのに、新聞記者は誰もいないのでしょうか。いらっしゃいますか。

(菊地) 2 社取材に来ましたが、多分帰ったと思います。

(島) もう帰られましたか。そうですか。テレビや新聞の方々に、これが今まさに考えるべき話題なのだということをもっとアピールして、新聞紙面なり今日の夕方のニュースに流れれば、少なくとも一般の方にグリーンインフラという言葉が少しでも伝わっていくのではないかという感じがしました。

それから、金沢でこれをやることは、あまり意味がないかなという気が少ししました。聞けば聞くほど、金沢は先進的にこれを進めている場所です。将来的に、何の要素もないような場所でやる時にはどうすればいいのかを提案してくべきではないかということです。今日いろいろなお話を聞いて、すごく大きな風呂敷だなと感じました。これを現実的に落とし込むときに、どうしたらいいのかということがあります。

福岡さんのお話の中で、暫定的なパブリックスペースの創出というのがありました。グリーンインフラをちょっとやってみるといのは結構現実的です。それから菊地さんのお話にあった可逆性は、とても重要ではないかと思います。ちょっとやってみると、みんなが見て、これはいいかもしれないという経験を積んでいくということです。それから菊地さんのお話で、コウノトリが降りてきたということがありました。これを聞いたときに、私はまさにアーティスト、アートではないかと思ったのです。

皆さんもご存じだと思いますが、越後妻有という新潟県の十日町で 2000 年以來ほぼ 20 年、3 年に 1 度国際的な芸術祭をやっています。地元の人にとっては、アーティストが突然やってくるわけです。まさにコウノトリのようです。最初は違和感があります。「何だ、こいつらは。俺たちの村で何をするつもりだ」と、非常に反発も多かったのです。3 回目のときに中越大震災が起こって、アーティストの作品が壊れたり、いろいろな大事件がありました。それを乗り越えて、今年が 7 回目です。今月の 17 日で終わってしまいますけれど、本当に大規模なイベントになっているのです。そして、雇用も創出されました。

私は明日、パネリストとして市のイベントに出ます。今日は国交省と環境省の方だけではなくて、文科省の方もいてくださると、また違う話題につながっていたのではないかと思います。

最後に一つだけ。雪吊りが特別なもののように感じられたのではないかと思います。私は富山県出身で、毎年自宅の庭を雪吊りするのです。大体 15 万円かかります。今、母親が 1 人で住んでいます。いつも弟と「母が死んだ後どうする？ 毎年 15 万円かかるけど」という話をしています。雪吊り自体は、北陸エリアでは一般の家庭でもよくやっているのです。兼六園では何となく特別感がありますけれども、そこは認識していただけるとありがたいです。

(菊地) いろいろと論点を提示していただき、ありがとうございます。グリーンインフラを金沢

でやる必要はないのではないかという話もありましたが、それはまたゆっくりお話しできたらと思います。

もうそろそろ時間です。金沢市の都市整備局長の木谷さんが来られているので、よろしくお願いします。

(木谷) 市の都市整備局長をしている木谷と申します。今日の話をお聞きして、自分はグリーンインフラという単語自体をしっかり勉強してこなかったで、とてもたくさん教えてもらうことがあったと思っています。ありがとうございます。濃密な時間を過ごさせてもらいました。

ただ、正直言って、グリーンインフラは、今の島館長の話ではないですけど、あまりに風呂敷が広過ぎて。緑だけなら緑化政策です。最初は、グリーンが単語として持っている、環境に優しいという意味合いを込めた、インフラと結び付けた何なのかと思っていました。そこに文化から何か全部くっついてくるという概念がなかったので、今回はすごく勉強になりました。

菊地先生が順応のと言いましたが、それでまさにこれからの話なのだということを感じてしまいました。今の段階では、グリーンインフラを核に据えて、ここを中心にして計画論を組み立てるのはまだ無理だと、正直思いました。今までは単機能的な形で、整備などいろいろな取り組みをしていることが多いのですが、これだけの多機能性があるという評価をどれだけ積み重ねていくかがすごく大事です。この視点はアフターフォローにもつながってくるので、すごく大事なのではないかと思います。そのようなことの積み重ねで、こういう効果も生むのだっただらということ、市として予算をつぎ込むなど、次のステップとしての働きが出てくると思います。

いろいろな方がおっしゃっている、まずは身近な体験からという話を含めたアプローチをしていく中で、何か整理されていって、一つのガバナンスや仕組み、システムとしてグリーンインフラが組み込まれていくことになる可能性を秘めていると感じました。

島館長がおっしゃったのですが、私も同じような感覚です。金沢市は今までグリーンインフラという概念を持ってやってきたわけではないけれども、景観に関しては、われわれはよく文脈という言葉をつけています。時代の多層性と重層性や、文化があって、芸事・工芸・生活が背景にあって出てくるのがわれわれの景観だという考え方だけは、長い年月ずっと持っていたと思います。そういった意味で、「ああ、俺たちがやってきたことはグリーンインフラの思想にかなり近いな」と思いました。もしそのような事例があるとしたら、私たちが気付かない中で評価してもらうことで、次の新しい展開や、次にやるものに対する価値付けができる可能性がたくさんあると思いました。

明日は50周年の景観のシンポジウムをします。半世紀やってきた中で、私が個人的に今まで一番手を付けられなかった部分は、ファンさんの話にもありましたが、庭だと思っています。どうしてもプライベート空間に税金を入れることの是非が大きな壁としてあります。今のところできるのは、文化財の指定を受けてもらうことです。ある一定の公開などの条件をのんでくれる方の庭に関しては一定の公共性があるということになります。あとは保存樹という形が、唯一つながっていた道です。

プライベートな空間の庭は、本当に大事にしなければいけません。先ほど会場の方からあった、大きな立派な庭の話ではなくて、全体の緑を増やすというときに、市の方でも先ほどやっても意味がないよと言ったのは、まさにそのとおりです。新築したときには、木を1本プレゼントという制度もあるのですが、一昔前は、小さい家であっても一定の庭をきちんと構えることが、きちんとした家であることの証明であり、きちんと管理をすることが近所に対するステータスでもあったのです。その価値観がだんだんなくなって、最近の流れとしては、ガーデニングはするけれど、日本庭園的な作庭はあまり行われないうところにもつながっています。駐車場をつくりたいという、経済的もしくは効率性のものが入ってくると、木1本植えるよりはコンクリで固めることが優先さ

れてしまいます。

それでも木 1 本ぐらい植えるスペースは、少し工夫すれば取れるはずなのです。体験とかいろいろなものをうまく使う中で、せめて木 1 本くらいは植えようというのをやりたいという思いを持っています。

グリーンインフラ自体は、分かりやすそうで分かりにくいです。全体の概念でいくと、よく分からないし、そんなに関心はないけれども、100 人いたら 99 人までは「いいことじゃない？」ときつと言うと思うのです。新しい政策で、AI や IoT と言うと、「大事だ、いいよね」と言いながら、体・気持ちのどこかでアレルギーみたいなものがあると思うのですが、このグリーンインフラに関しては、それは多分ないです。でも、ない分だけかえって分かりにくいです。分かりやすそうで分かりにくいのがこれなのだ、今日は思いました。でも、この先にたくさん面白そうなアプローチがありそうなので、一緒に勉強させてもらえればと思います。

(菊地) ありがとうございます。ぜひよろしくお願いします。かなり大風呂敷を広げる視点であるのは確かです。だからこそいろいろなものがつながる可能性もあるのですけれども、非常に分かりにくいというか、ビシッとこれだというのがなかなか示せないところがあって、行政としては政策に乗せにくいということもよく分かります。

われわれ研究者側としては、地道にデータを取って、データから議論をしていくことも必要ではないかと思えます。それがあれば、行政なりいろいろな人の間で、こういうことが分かったのだから、こういうことができそうだという議論になっていくと思えます。金沢を中心としたチームで、今後そのようなことをやっていければと思っていますので、末永くお付き合いできたらと思います。

最後に、同志社大学の佐々木先生から。

(佐々木) グリーンインフラ派が何となく劣勢になってきました。私を最後に持ってきたのは、多分もう一回生き返らせるためです。

ちょうど 1 年前のシンポジウムの後で、来年は都市景観 50 周年でもあるし、グリーンインフラという議論が出ているから、これを一つにしてシンポジウムができないかということ、何人かと話しました。今日は長丁場でしたが、面白かったです。新しい概念を提唱したときに、一番良くないのは冷笑されることです。Benign neglect、無視されるということです。少なくとも無視はされていないので、自信を持ったらいいです。

私は、「創造都市」という言葉を 20 年前に本に書きました。日本全国のあちこちでしゃべっている中で、金沢で話をしたとき、私は 21 世紀の新しい都市の在り方が創造都市だと思っているのですが、「そんなことは 400 年前に加賀藩がやっていた」と言うわけです。これは金沢の自負なのです。例えば、400 年前に辰巳用水をつくりました。これが兼六園の中で、噴水になっています。あれは琵琶湖用水より先に、逆サイフォンを利用したのです。これはグリーンインフラでしょう。その用水が、今話題になっているように、金沢のまちと周辺の農村をつないで、水の体系がきちんとできています。

今日ファンさんの話で改めて思ったのですが、用水と庭園の曲水をつなげて見ることは、あまりしませんでした。それこそ日本庭園は、一つ一つの庭園については分析しています。例えば琵琶湖疏水ができた後に、東山沿いに曲水を使った新しい庭園が出てきました。これは名庭園です。これもやはりグリーンインフラです。そうすると、グリーンインフラは何も新しくないのです。しかし、新しい要素があるのです。

大量生産・大量消費で、町や田舎を壊してきました。グレーインフラでむちゃくちゃにしてきました。そのグレーインフラからグリーンインフラに切り替えるということ、はっきり言うという

ことです。これを言う勇気がないと、広がりません。それは、行政は言いにくいのです。環境省、国土交通省は言いにくいです。でも研究者は、言わなければ駄目です。研究者の使命は、社会の中で少数派になることです。多数派は、みんな手を挙げるのです。この中で1人しか意見を言わないけれども、それは意味があるということを言い続けなければいけません。そうすると広がります。だから、こんなに意味があるということを、研究者はがんがんに書かなければいけません。行政の方は、その後を付いていけばいいのです。

もう一つ、私は20年前に本の中で、インフラ論を書いたのです。これからは、文化に基づく創造支援インフラというのが社会に大事だと書いたのです。でも、創造支援インフラという言葉は固いし、インフラはこの国ではどうしても公共事業になってしまうのです。それで次の本では、それは優しく言うと創造の場だと書きました。英語では creative milieu という言葉があります。グリーンインフラはもう少し柔らかく、「緑の場」とか、誰かそのような仕事をする人が出てきてもいいと思います。

いずれにしろ社会というのはリニアではなくて、スパイラルです。400年前に加賀藩がやったさまざまなグリーンインフラ的な先駆的事业を今の視点から見直したときに、生態系サービスという言葉はないけれども、当時からそのような概念があったということです。

金沢は400年前からグリーンインフラの都市であると言ってしまった島さんのように、金沢でそのようなことをやる必要はないかという、反対なのです。フアンさんのデータのように、空き家・空き地がどんどん増えています。放っておくと、庭園・池がなくなります。そこをどうするのかという話です。

そこでどのようにグリーンインフラ的な地域計画をするのか、あるいはエリアの計画をするのかです。このモデルを、今から始めるのです。そのようなものが出てくると、行政もやはり意味があると思うのです。だから、金沢でこそ、これを進めるのです。東京は放っておいてもいいです。金沢ぐらいの中核市・地方都市の代表都市でモデルをつくるのです。実は金沢がやっていることを、全国区でウォッチしています。例えば歴史まちづくり法も、金沢が1号なのです。創造都市も1号なのです。ですから、もう必要ないではなくて、私はここでこそやるべきだということで、応援したいと思います。

(菊地) 最後に非常に力強い、叱咤激励をいただきました。金沢でこそできることは、たくさんあるのです。ここが世界の最先端になるような取り組みをできるように頑張りたいと思います。

今回のシンポジウムは非常に長く、総花的でいろいろな話が出て、なかなか消化できないと思います。これを報告書という形できちんとまとめて、皆さんと共有できる形にしたいと思います。今回が、いろいろなところでいろいろな化学反応が起こり、いろいろな人が出会って、いろいろな考え方が生まれて、金沢で面白い未来に向けた取り組みが生まれるようなきっかけになればと思いますので、皆さんよろしくお願いします。

閉会の挨拶を渡辺所長、よろしくお願いします。

閉会挨拶

渡辺 綱男（国連大学サステイナビリティ高等研究所

いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長）

2日間、遅くまでお疲れさまでした。そして本当にありがとうございました。深夜までエクスカーションもあり、今日は丸一日議論と、大切なテーマについてホットに、率直に意見を交わせたのがとても良かったと思います。

今回、金沢大学の企画に私たち国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（OUIK）も乗って、共催という形を取りました。OUIKは、石川県と金沢市に応援していただいて、10年前にできて、10年の道のりを歩んできました。今年は節目ということで、今日も出てきた持続可能な開発目標（SDGs）をテーマにし、いろいろな目的があるので、シリーズで「SDGs いしかわ・かなざわダイアログ」の第5回にも位置付けて、共催しています。

2008年にドイツのボンで、生物多様性条約のCOP9がありました。そこで、COP10を日本でやることになりました。そのときに金沢大学、石川県、国連大学でボンまで行って、里山のサイドイベントをしました。それがきっかけとなって、世界の里山について議論するパートナーシップが、COP10のときに生まれました。その出発点は石川からの提案で、世界の人に里山のコンセプトを伝えました。石川が生まれた地であるという関係もあると思います。それを皮切りに、10年間いろいろなことをやってきたわけです。

2010年にCOP10があって、自然との共生という目標を世界で導入して、翌年に東日本大震災がありました。COP10のときは、自然は恵みを与えてもらうものだから、どう共生していくかが大事だという議論をして、自然との共生という愛知目標を世界で合意したのですが、その直後に東日本大震災がありました。時には厳しい試練をもたらす自然とどうやって付き合っていけばいいのかも、大きな課題になってきています。

COP10から5年たって、仙台で防災の世界会議が開かれ、仙台の防災枠組みが決まって、パリでは温暖化のパリ協定が決まりました。そのような中でも、災害をもたらす自然とどう付き合えばいいのか、そのときの生態系をどう生かしていけるのかがとても大事なテーマになりました。SDGsの中でも、災害に対応していく社会をどうやってつくったらいいかがとても大事なテーマになってきています。

今日皆さんに議論していただいたことは、国際的な議論の場でもとても重要な課題になってきています。すごく意味のある議論だったと感じました。そして何よりも大事なことは、一つ一つの現場で、地域でグリーンインフラをどうやって実現していくかだと思います。金沢を舞台にして議論できたことは、とても良かったと思います。

私もOUIKに関わって、ファンさんと飯田さんの話にありましたが、金沢の網の目のような水のネットワークを強く感じてきました。その中で、飯田さんのホテルの調査・文化マップ作りに関わりました。30年間、金沢の人たちがここの水のネットワークとどう関わってきたのかを、もう一回見つめ直す機会となりました。かけがえのないものだと思います。

ファンさんや佐々木先生もおっしゃったように、一つ一つの庭園が用水とつながり合っているので、庭園を結び付けていくことが大事だという視点に、私自身もはっとしました。地域の人が、自分たちの地域を改めて見つめ直して、それをどう活かすかが、金沢らしいグリーンインフラを考えていく上での重要な出発点ではないかと思います。

エコデモ発見は、これから金沢で、地域の人たちが自ら地域を見つめ直して、何を金沢が目指していくかという将来像を描くためにも力になるのではないかと思います。

私は、強く印象に残った言葉があります。土肥さんの、「自然を治せば社会は治る、社会を治せば

自然は治る」です。私も、自然の仕事を数十年やってきました。どちらかというと野生生物や国立公園など、自然をターゲットにして取り組んできました。それだとなかなか進展できないときに、社会のいろいろな課題と結び付けて取り組んでいくことで新しい前進が見えるのではないかということ、最近強く感じています。

グリーンインフラも、本日、多機能や多目的がキーワードとして出ましたが、社会の課題と結び付けて、自然の問題に取り組んでいくことが、自然のためにも新しい展開につながるのではないかと考えています。そのような意味でも、本日はとても大事な議論ができたと思います。

この場に行政からも来てもらいましたし、研究者の人もいますし、地域の人たちもいます。そのような人たちが、行政に協力するという関係ではなくて、みんなが持ち味を生かして、一人一人が主役になった柔らかいガバナンス、柔らかいパートナーシップをどうつくっていくかが、新しい展開にとってとても重要だと思いました。私たち国連大学 OUIK もパートナーシップづくりの一員として一端を担って、皆さんと一緒に今日のグリーンインフラのテーマを掘り下げていくような取り組みをしていきたいと思っています。

『決定版！ グリーンインフラ』という本が出たので、私も読ませていただきました。金沢での取り組みが進んだときに金沢版グリーンインフラの本が出せるように、今日の議論をきっかけに、金沢ならではのグリーンインフラを、みんなが主役になって、議論してつくり出せるようになればと思います。

昨日からいろいろなところでお話をしていただいた、今日も登壇していただいた皆さんに会場の皆さんから大きな拍手を送っていただいて、閉会の言葉にしたいと思っています。どうもありがとうございました。